

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十一年十月十五日發行(毎月一回・十五日發行)

(通第七十九号)

慈

光

第七卷

第十號

目

信生活の三要点……………花田正夫…(1)

めぐね(隨想)……………柳瀨留治…(6)

次

歎異抄の何処か……………池山栄吉…(9)

信生活の三要點

花田正夫

故安波勲八医師の『信仰体験録』の第一編『死の宣告をうけて』の項に、福岡の医大で、胃痛ですでに手術不能といふ死の宣告を受けられた安波医師が、その後も、眼科医として診療を続けて居られ、夜には信仰上の相談にも応ぜられると云ふ状態であつた。

親戚の人々は、そんな大病で働かなくても、と申されるけれど、これは私の自由にまかせて下さい、決して無理はいたしませんからと、しばらくの間悠々と診療を続けて居られた。

主治医の末綱氏は『信仰的人格を始めて安波氏の上に見る』と讃歎して居られたが、その末綱さんが、発起人となつて、不治の病を抱へて、一日一日死を待ちながら診療を続けられてゐる安波氏を、何とかして慰安する途は無からうかと、種々に思案せられた拳句に、懇意な友人同志が相寄つて、送別慰安会を催し、病人がまだ食欲のある間に御馳走をして、一晩ゆつくり歓談しようといふことになつた。

以上の三つの条件のうち、どの一つが缺けても駄目である。即ち、どこまでも生きて居たいといふ願ひがなく、駄目なのか、それならばあきらめよう、といふのであれば慰安会は無用である。

また萬が一にも治るかも知れぬといふ道があれば、治すことにかかりはてて、送別会どころではない。

最後に、胃痛で手術も出来ぬとあれば可哀想でも仕方はない、もうどうしてやりようもないことぢや、だけであれば、送別会ほ成り立たぬけれど、そのどうして見ようのないところを同情し、何とか慰安の途はあるまいかと苦心してくる温い友情があつて、この会も開かれ、その目的も十分に達せられた。

そこに、以上の三点が、三脚椅子の三本の脚のやうに互に働いて、やすらぐことの出来ぬ身でありながら、存分に満足することが出来たのである。

これは、生別に死別をかねた送別会の上で安波氏が申されたことであるが、私共の信生活の全体がそれでやらせて貰うてゐる。その三要素のどれが缺けてもならないことである。

信の上の三要点

一、絶対善をどうしてもなし遂げねばならぬこと。

大正十四年の暮、某料亭で、美形も四人混つて、極めて陽気な送別会が催された。おしまひには安波氏を食卓の上に載せて、誰やらが『石の地藏さん』を歌ひ出すと、一同がこれに和し、何とも言へぬ清宴であつた。かうして会を閉ぢたのは十二時一寸過ぎであつた。

さて一生一代の送別会が、十分にその目的をはたし、存分に慰安せられて、共に意義ある一夜を過し得たについて安波氏が深く省みられて、それには三つの条件が必要であると前書されて、次の如く誌されてゐる。

一、私にどこまでも生きて居たいといふ念願があること。
二、如何なる方法を以つてしても生きる道がないこと。
三、どこまでも生きたいが、如何なることをしても生きられぬ私であることを知悉し、この私を同情し、この私のために何とかして慰安の方法を講じたいと云ふ、友人の親切のあること。

二、それが一分一厘どうする力もない身であること。
三、この者をかねてしらしめして、無限の温い心でおさめとつて下さる絶対の仏のまことのましますこと。

先づ第一の要点について見るのに、この願が一つ人生にあらはれて来ないと、地上に光といふものは無くなる。これは、人間として生れ出た限りしつかりと打ち建てねばならぬ要点である。

白樂天の逸話に、彼が鳥窠禪師を泰望山に訪うた時

『曰く、仏法の大意如何。

師曰く、諸の悪をなすなかれ、衆の善を奉行せよ。

曰く、三歳の孫兒もまた斯様に道ふことを知る。

師曰く、三歳の童兒も道ひ得るといへども、八十の老翁も行ふことを得ず。』

と問答があつたことは余りにも有名である。

私は茲に、聖徳太子の御臨末に、山背大兄王を始め、あらゆる皇子達に遺言せられて

『諸悪莫作 諸の悪をば作す莫れ
諸善奉行 諸の善をば奉ひ行へ』

と仰せられたことに襟を正さしめられるものがある。さて諸悪といひ、諸善と申される、太子の具体的な

提唱を十七憲法にうかがふことが出来る。

『和をもつて貴しとなす、忤ふこと無きを宗と為せ』

『あぢはひのむきほりを絶ち、たからのほしみを棄て、

明らかに訴訟をわきまへよ云云。』

『このころのいかりを絶ち、おもてのいかりを棄て、人の違ふを怒らざれ云々』

『悪をこらし、善をすすむるは、古の良き典なり』

等々。十七条のすべてにわたる問題である。そしてその一つ一つが、人として生れた者同志が、その道を通らして貰はねばならぬ、その道によつて始めて人としてのやすらぎを得、光といふものが地にあらはれる極く自然なみ教であるとなづかれる。

次に第二の要点であるが、太子憲法を、自分の力をもつとして、文字通りに実行しようとなると、さう願へば願ふ程、崩れ／＼と、一分一厘どうにもならぬ身と知らされるばかりとなる。

正しい裁判は欲に曇つた眼では不可能である。我是なり彼非なりだけであれば限りのない修羅場、人類の滅亡があるばかりである。そこにどうあつても悪を懲らし善をすすめるといふ道を聞かねばならぬ。然しそれが相對善にとどまつて、また行き詰り、逆転する。絶対善の天空に向つて飛びあがらうとして、しきりにあがく下から、またしても

落ちて行く、翼を失つた鷲の悲劇を、無力でありながら、消すことの出来ない願の中に、血まみれになつて繰り返すばかりである。

法然上人は、父君が殺害せられる臨末に、怨みから恨みにおちな、怨は恨なき心から消ゆ、恩讐一如の道を得よ、との遺言をうけられ、十五の時叡山にのほられて、四十三歳まで、修学修行、遂に

『法は深妙なりといへども、我が機すべて及び難し。經典を披覽するに、其智最も愚なり』

との大悲歎におち

『朝、朝に定めて悪趣に沈まんことを恐怖す。夕、夕に出離の縁のかけたるを悲歎す。忙々たる恨には波に船を失ふが如し、朦々たる憂には闇に道に迷ふが如し』

となられたのであつた。ここにおいてか、上人が觀經積において、『下品』の機について、『この品もつとも要なり、すこぶる我等が分に相当せり』と釈せられ、御自身は終生『十悪愚痴の法然』と名告られてゐる、自照せられてゐるのである。

最後に第三の要点である。

絶対善がどうあつても実行出来なければ、人生に解決と

るなり』

歎異抄九条。

いふことは微塵もあり得ぬのであるが、それは不滅であるが、悲しい哉無力な願ひである。地獄は一定とくつおれるほかはない。光のない砂漠のはてしない彷徨である。しかし遠い昔から身によつては我執、妄想が、人生に光があるかに錯覚させ、性こりもなき流転を続け、ぐづ／＼とし、ほんやりとして、アツと言ふ間に生涯を終らねばならぬ。醉生夢死とは私の心根をおさへての警句である。

オウガスチンによれば『人間は神の方にむけられて作られてゐる』のだと説かれてゐるが、よし神の方に向けられてゐても、一分一厘歩む方の無い者には、蹇の身には何として見ようもないことである。

あ、幸にも、ここに、法然上人の御勧めを聞き、親鸞聖人の仰せを蒙る。

『余が如き下機の行法は、阿彌陀仏の法蔵因位の昔よりかねて定めおかるるをや』 法然上人伝。

『しかるに仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫……いづれの行にても生死を離るることあるべからざる身……と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくの如きのわれらがためなりけりとしられて、いよくたのもしく覚ゆ

仏かねてしろしめす世界は、如来の御智慧の光に照らし出された、仏陀の大客観の世界である。その仏陀真実の大客観に遭つて、われら凡夫の小主観、是非善悪の自力の妄執が、押し倒され、打ち砕かれて、廣大無辺の大海におさめられるのである。そこに独善や無定見の暗が破られて、わが道が即一切人の道、といふ妙味を恵まれる。『親鸞一人がため』との仰せが、そのまま『わたし一人がため』とひびき、そこに青草人のあらん限りの道がほのかに照らし出される。噫何たるよろこび、何たる感謝であらうか。

三要素の持統

三脚椅子が、何時も三本の脚で支へられて安定する如くに、信仰生活はこの三要素をもつとして、やすらぎ、やばらぎを恵まれる。

卑近な例で申すと、私の五年間の蓬戸不出の療養生活の中に味つたことがある。それは私の郷里の法友や病友の方々が、是非帰れと呼ばれる、私もお遭ひしたくてたまらな。だがそれが出来ない。そこに

一、どうかしてお会ひしたい。

二、病気に障へられてどうしても出来ない。

この二要点につきあたつて行き、解決のつけやうがな

い。然しその焦慮の底に立つて、今自分は会ひたいが会へぬ、会へぬが会ひたい、といつて苦悶してゐるが、よし望みが叶つて会ひ得たにしても、それはやがて『会者定離』の嵐の前にハラハラと消え去る喜びではないか。一度会うて永遠に別れることのない会ひ方、さういふ道は絶無であらうか！

かうまで思ひつめる時、そこに心の底から暗を破つて浮び出て下さるのがお念仏であつた。そして『今生、夢のうちのみぎりをするべとして、来世さとの前の縁をむすばんとなり。われおくれなば、人に導かれ、われさきだたば人を導かん。生々に善友となりて、たがひに仏道を修せしめ、世々に知識としてともに迷執をたたん』との唯信鈔の末尾の文が浮び出て下さり、そこに、第三の要素が働いて下さつて、どうともして見やうのない胸が、そのままに『俱会一処』のひかりを頂いて、何とも言へぬよろこびにひたつたことである。

そして聖人の御歌心にふれる。

こひしくば 南無阿彌陀仏を称ふべし

われも六字のうちこそすめ

七百年の歳月も夢と消え、何百里、何千里の山河のへだたりを飛び越えて、只今の一念に、親しく生きませる聖人にお会ひ出来る不可思議さ、『ただ念仏して』の大悲に、ほんたうにお会ひ出来る道がひらかれるのであり、そこに

め が ね

めがねといふものは子供にとつて不思議なもの、やうである。乳のみ兒などを抱くと、直ぐ眼鏡をつかんでひつたくる。眼鏡は眼の玉より大きくてキラ／＼光るので注意を惹くらしい。肉眼も可成珍しく見えるらしく、乳のみ兒はよく手を出して引掻かうとするものである。蜂など第一に眼を狙つて刺しにくる。その眼玉の上に更に大きく掛けるのだから珍らしいものに見える筈である。うるはしい眸などは眼鏡によつて美が殺されるであらうが、さうでない眼はごまかしになつて、却つて美しくしたりするやうだ。私はどうしたことが眼鏡の人に好感を持つやうになつた。だが太いセルロイドやベッコウ縁の大げさなものは虚仮おどしのやうで嫌な気がする。以前金縁の眼鏡の蔓に時々白粉のついてゐるのをしている奥さんがあつて、クリスチャンでつゝ、まじやかな人であつた。そんなことから眼鏡の人が好きになつたのではなからうか。どうしたことか私も家内も娘もみんな眼鏡を離せないやうなこゝとなつた。

私など山村に生れたので、村に眼鏡をかけた人など見か

心からの満足を味ふのである。

三十年、秋彼岸中日。

アラビヤ物語

父曰く。この古籠に水を一杯満たして来れ！。子思ふ。父の言葉なれど、それは無理な注文なり。

然し父の命なる故なるとか工夫してみらすべきならん。て。かくて彼は河辺にいたりて工夫をこらすこと半日、つひに父の命令を果すことを得ず、歸りてその不可能なることを父に告ぐ。

父曰く。そはむづかしきことなりならん。しかれどもさうすることによりて何か発見するものはなかりしや。子曰く。ただ一つ、幾度も籠に水を入れることによりて籠がきれいになれり。

父曰く。そのわけをさとしめんがために、かくなせらるなり。

足利澤田師著、枯草の露抜。

柳 瀬 留 治

けなかつたやうである。物心ついて父の手箱を掻き廻してゐると紙貼りのサツクに入つたものが出てきた。姉達は眼鏡だと云つた。おぢい様の形見だと云つて聞かされひどく大切なものだと思つた。でも時々持ち出して掛けてみた。何も見えなかつた。老眼鏡であつたのであらう。忘れもせぬ、真鍮の縁で二つの玉の真中、眉間に當る所に眼との距離を保つ支柱のやうなものがついてゐて、それを起して掛けるやうになつてゐた。耳かけは蔓ではなく紐の輪で掛けるのであつた。私が持出して失くしたものが、少年の頃には見かけなかつた。その後父が年寄となつてそした眼鏡をかけてゐた。どこかの老人の形見のやうだつた。

私は幸ひ近眼にはならず、人よりも遠く見える方だつたが兵隊検査の頃酒落れ気がついて生意気にも素通しの眼鏡をかけてゐた。これも一年位の間のやうに思はれる。四十過ぎてから本当に眼鏡が必要になつた。私は編輯が仕事で九ボヤ六号活字のルビが読みづらくいら／＼しだした為である。その内にお月様が二つの輪を重ねて見え出した。友

人がひやかして「鑿口の鏡が各々二つに見え、女房が二人になつて見ると面白いぞ」と云つた。視力を計つて眼鏡を作つてもやがて合はなくなり、遠視性不定形乱子と云つて、眼鏡に不定な凸凹が出来たのだから、眼鏡の作りやうがなくなり、漸く全体に遠視をかけて、乱視をふき消すことにした。

肉眼といふものは精巧に出来てゐるもので山に登つて霧に遭つても、又錢湯の湯気にかゝつても、瞬げばみな涙にしてしまふ。眼鏡は視力に合せ精巧に出来るが、冬の汽車などに乗ると急に曇つて見えなくなり、困るのは吹雪の中を歩くとベツタリ雪がつき、又スキーに行つてでんぐり返ると雪がべつたりくついで見えなくなり、でんぐり返つた途端に何処かへ吹つとんで、雪の中をかき廻してやつと見つける、そうした時には眼鏡を外してどこかへ藏ふ。不十分な肉眼でも、吹雪に遭つても氷が張つたり、雪が積つたりはせぬ。肉眼の精巧さに我ながら驚いてゐる。又暗い晩には眼鏡をかける物が見えなくなる、絞りがかゝるのださうである。そうした時には眼鏡を外した方が、不十分な肉眼でも明るく見えることである。又雪山などを歩く時反射光よけの眼鏡を持たぬ時、瞼を細めて睫毛で光線よけが出来る。以前奥秩父の甲武信嶽から金峯へ縦走の途中雨のため国師の大地小屋に泊つた。濡鼠の体に夜寒を迎へるのどつさり生木を伐り入れて一晩もした。目を開けられぬ煙

が生涯の大事業である。古へから東洋では己れを知るといふこと、それに伴つて足るを知るといふことが生をかけての大道とされて来た。それは昔のこと丈でなく今現に我々が人生の上、芸道の上で痛く感じてゐる。最も自分に近い己れの正体が判らないで、その幻影見たいな掴み所のないものに引き廻され、偽られてお互に正しい方針が立たず迷ひ迷つてゐる。

私はめがねを外して何処かにひよいと置く。処がそのめがねが、めがねなしでは探し当らず屢々当惑する。めがねも体の一部分となつて切り放すべからざるものになつてゐるのである。だが体に付着してゐないのでよく失ふ。又よく眼を悪くした時、フリクテンが生じたのかそれとも充血したのか鏡に向つて見ようとする。処がめがねが邪魔になる。邪魔なめがねを外すと己れの眼球をはつきり見られないので、之又当惑する一つである。何れも視力を補つてくれるめがねが本当に自分の体でない為のことであるが、要は欠陥の眼で正しく物が見られないといふことにある。

近い自分自身の正体が見られないといふことは鏡で目を見るのに邪魔だめがねなしで見えないと同様、視力の欠陥に関する。人間の心眼にも欠陥があるのである。己れを取りまくもやゝに邪魔されて見えないのであらう。時にはそのもやゝが己れの正体かと思はせられることもある。めがねの曇つてゐるのも知らずに物がぼつとしてゐるの

さだつた。焚火育ちの私はそうした時には目を細める、煙いために出る涙を睫毛に一パイため、涙越しに物を見る。すると眼を損ねない。同行の一人がそれをしなかつたらしく、翌朝眼が眞赤で何も見え、漸く下山し、歸つて明々堂かに入院し一週間がかりでどうにか見える様になつたさうである。肉眼は実に微妙な働きをする。

めがねに補つて貰はねばならなくなつて、めがねは有難いものだと云ひながら、その欠点を愚痴る。我々人間は、言はせて置けば勝手至極なものである。迎も之は人界を離れ、六通自在の自通力を持つ悟りの境界にでも至らぬとつきない愚痴であらう。六通の一つである天眼通は過去現在未来の三世に亘り十方世界を一目に見通す眼力だといはれる。も一つの知他心通といふのは、普く十界に亘り諸衆の心心を知り通し得る通力だといふ。夢のやうな話である。よくデパートで見る熱帯魚のやうにみんなが陽綿まで透けて見えたら世の中はどうであらう。人間といふものは誠に味気なく見えるであらう。だが一方つまらぬ嘘偽虚飾を弄して相争ふことがなくて人生が嘘を氣楽なものとなるであらう。他心通は兎も角、天眼通に対し科学力を以て迫らうとして顕微鏡や望遠鏡や潜望鏡やさまゝ發明されたのであらう。

私の欲しいと思ふのは己れ自身の本當の姿、己れの正体があるには見られるめがねである。己れを知るといふことだと思つてゐることがよくある。自分のめがねの曇つてゐるのが又自分で気がつかない。人はいはれてさうかと氣付く。火鉢の火など吹き起した後、其儘氣付かず心掛けてゐることがある。

短歌草原、九月号抜。

近詠

柳瀬留治氏詠

借りを負ひて続く愚なり雑誌磨てて直に専に詠めと
宣すや
甲斐あらぬ歌詠を続くと瘦せやせて骨露はなる歌となりゆく
省みて足れりとなさむ幾人を育み得たる遠しもよ道
奴豆腐ひとは切りをりかくも世に易くなし得むことの
あらなく

仔 犬

蚤とりて呉る嬉しみ、わが膝に眠れる仔犬、眠りこ
け、すり落ちつともなほし眠れる

あるじ我に叱られやせむと氣兼ねる仔犬。我の目に目
立たぬ様に、少しづつ畳いざりて、妻が膝に甘えてい
寄る、幼な子のごと

歎異抄の何處か(二)

池山榮吉

歎異抄の最初に

『弥陀の誓願不思議にたすけられまらせて、往生をばとぐるなりと信じて』

とある、この信するといふこと一つが肝腎かなめで、絶

対他力、親鸞聖人の宗教は、これ一つに終始する。

祖師の信後、紙衣六十年の生活は、ここ一つの味を、自らも味ひ、人にも味はせたいとの精進に外ならない。

この信の発生の瞬間は『念仏申さんと思ひたつころのおこるとき』で、これがすなはち、信の一念、聖人のいはゆる『信樂開発の時尅の極捉』であります。

信の一念の体験

如来と私共との関係について段々申し上げますが、私はあらためて言ふまでもない、仏教的學問にかけては、いろはのいの字も知らないものであります。だのに嗚呼がましくもこんな席で、こんなお話をすといふことは、私には、これが信の一念であつたか、時尅の極捉とはここを言

はあられない心状に陥ることがあります。

それについて世間によく『信仰はなか／＼得られるものでない。煩悶にでも陥るといふのだが、私にはまださうした機会がないので』など、聞くことでありますが、私に言はせれば、人は何時でも信仰にはいれる。それに必要な材料を現在持ち合せてゐない人は一人もないのであります。

しかるに信仰にはいる人のすくないのは、つまり自分の本當のありさまが、まだ自分にわからずにあるからです。それが意識のほつて乗さへすれば、信仰はいやでも應でも求めずにはゐられなくなり、その結果、きつと与へられずにはゐらないのです。

自知の早道

自分のありさまを如実に意識するといふことが、甚だ容易でない。私達は外に他をみるにさといだけ、それだけ内に自らをみるにうといのが常であります。

ところでみなさんはいかがですか。皆様はおのれみづからをどう知つておいでですか。もしあまりよく御存じないならば、ここに手取り早く知る方法があります。それを伝授してもよいのです。

こころの日記

それはほかでもありません、心の日記といふものを書く

つたのであつたかといふ、いはば、やゝそれらしい体験がありますので、それ一つを種として、うちたたへる感想をありのままに申し述べただけのことです。

ところが、それがなかなか言へないのです。また言へないのがあたり前なのです。人の感じをあらはすには、言葉はあまりに不完全であるばかりか、心的経過そのものも、一々みなはつきりと、意識のほるとはかきらないのです。このコップの水を一口飲んで、さてその味を語らうとしてさへむつかしい、況んや非常にこみいつた宗教的感じを、信への憧憬、入信の刹那、信後の気持を言ひあらはさうとするのですもの、その至難なるや、また宜なりといふべきであります。

入信の資料

水を飲んだことのない人には、いくら水の味ひを喋々と話しても、なか／＼徹しません。併しのどの渴きを感じる人は、水を飲まずにはゐられないうやうに、信仰を求めずに

のです。心の日記とは、今日は温かつたとか、だれそれが来たとか、何処へ行つたとか、そんな外的事件を記すのではありません。

朝起きて顔を洗ひ、飯を食ふ時から、寝衣を着更へてぬる時まで、次第によつては夢に見た事柄でもよい。一日中にわが心の辿つた道行を、全部でなくても一部でもよい、書いてみるのであります。

自分はどういふことを望んだか、どういふ感じを抱いたか、どういふことを意欲したか。なぜさうのぞみ、感じ、欲したか。それはどんな動機から出たのか、その動機の動機は何であるかといふ風に、それからそれと勇敢に、正直に、面もふらず突つ込んで行くのです。

が、その中には随分人に言へないやうなこともあるでせうから、人にのぞかれる心配のない密室の中で、誌すことを条件としてもよいのです。また書いたものがびよつと人目に触れてはいけないうやうに、書き終つたら即座に破るなり、焼きすてるなりしてかまはぬといふことまで条件としてもよいのです。

猛獸狩のすきな人は、わざ／＼印度やアフリカの奥地へまで出かけて、獅子・虎の類を狩るのでありますが、心の日記をつけてさへゆけば、それどころではない、もつと珍奇な、怪異な獲物に遭遇することは請合ひです。狐狸、豺狼の如きはありふれてゐます。源三位頼正の退治し

た、猿・虎・蛇の夜。テイベン市の門に出て、難解の謎をかけたときく半人・半獣のスフィンクス。その他、百鬼夜行をそのままの、すごいところが続々とあらはれます。

それ等を一つ一つ眼をそらさずみつめるには、かなり胆力を要します。単なる好奇心ぐらゐの、とても堪え得るところではありません。

私達が子供の時に描いてゐた幽霊、あの髪を振り乱し、血にまみれて、蒼い顔に目を据ゑ、歯をくひしばつて、両手のさきを妙な恰好に、胸のあたりたれてゐる幽霊が、恨み重なる仇の家に現はれて、暗い廊下を音もなく、スワツと伝つて行きながら、座敷からさす火影を受けて、突当りに立つてゐる姿鏡に、フトおのが姿を認めたなら、幽霊みづから驚いて、キヤツと声をたてやしないかと思ふ。日記の中から、こんな幽霊が出て来なければ幸です。

そんならさう言う夫子自ら試みたことがあるかといふと、実は一方に勤めておきながら、すぐまた話の底を割つて了ふやうであるが、私自らは日記として書いたことはないが、自分には、一々書きとめるまでもない、自分の真相が割合よく見え透いて困るのです。この点だけは、いくらか自慢が得意やうと思ひます。

人の心は知り難い

に終ることが多いのです。あゝなりたたい、かうもあらたたいといふ憧憬の我を、現実の我と取り違へて、これが本当の自分だなどとうけとると、鬼が笑ひます。それは丁度大晦日に一年中に踏んできた行路をかへりみて、感慨無量、今年はず期が狂つたが、来年こそはと切齒扼腕、大に元気を振るひ起すが、次の大晦日には、また同様の敷きをくりかへすのと一般であります。西洋の諺にも『地獄への道は、善い目的で敷きつめられてゐる』とあるのは、やはり理想に遂行の伴はないのを言つたのでありませう。

だから自分の真態を知るためには、むしろ目を後に向け、過ぎ来しかたの、我が所作をかへりみた方が確かでありませう。そこで瞑目一番、自分は果して如何なる程度に於て自利的であるか、はた如何なる程度に利他的であるか。自分は如何に自分の人格を尊重し、はた他人のそれを尊重するか、と沈潜してみることです。自己の本当の価値は、かうするとかなり正確に割出されませう。

かうして割出された価値の、案外薄少なのに驚かない人があるでせうか？。若しあるとすると、その人はどうかしてゐるのです。それは多分、自前に高遠の理想を欠いて、その結果、悪いことも当り前のやうに見なす没義道の人か、さもなければ、高く自ら道德家と任じてゐる人かも知れませぬ。

人の心は知り難いものでありますが、一層見え難いのはわが心です。

『汝自らを知れ』とは、昔ながらの、新味に富んだ格言です。

ニイチエは、わが心を蠍にたとへました。中身がドロリとして気味わるく、ヌマリ／＼として掴みにくいからであります。

わが心の中身の気味わるさに、おぞけをふるつた人であれば、まじめに信仰を求めぬ心も起るはずがありません。

憧憬の我と現実の我

自分を知る上に注意せねばならぬのは、自分は一体どんなものであるかと思つめるに當つて、目を將來に向けて比較的立派な自己が現れ、ややもすると自分で自分にだまされる。

即ち、現在から將來にかけて、自分はどんな目的を追求するか、そしてその達成の手段として、如何なる方法と覚悟を有するかと、前途を眺めてみると、そこにはかなり賢善精進な自分がうつります。それはその筈です、それは現実の世界ではなく、あこがれの世界であり、そこに現れるのは憧憬の我であります。

だから、現実といふ盤根錯節に出くはすと、その賢善さ・精進さはすこぶるあやしいもので、とらぬ狸の皮算用

所謂道德家の弊

甚だ妙なことには、道德家をもつて自任してゐる人には、みんながみんなさうでありますまいが、とかく突つ込んで自己の真態を看破することが、極めて不得手な人が少くないのです。一寸きくと逆のやうですが、いかにもさうなりさうなわけがあるのです。道德家はもとより道德を生命としてゐます。従つて自分に道德にかなはない点があれば、それをためなほさなければなりません。さうでないと道德家の命にかかはります。

さて道德家がわが心をみつめたとします。人の心は幾重にも包まれたXです。表面から見ただけでは中身はわかりかねます。上にゆくほど包みそのものは立派ですが、一枚々々はがしてゆくと、段々御粗末な、いかげはしいものが出て来ます。それから推し測つて見ても、中身は大したものでもないに違ひありません。ドロリとした、無気味な、蠍みたやうなものかもしれません。然し道德家がそこまで見たら大変です、手におへないからです、そこには道德家の立つ瀬がありません。

だから道德家はあまりに深く自己を洞見することをいたしません。これは手に余るな、と思はれるやうなものが出て来さうになると、忽ち眼を塞いで了ひます。臆病な犬が

強い犬に出喰はすと、あわてて引返して了ふのとかはりません。さうあるのに不思議はないのです。それは道德家の自己保存の本能のしからしむるところですから。

信の上からの自己洞見

道德家が自己洞見に拙なにくらべ、それに堪能なのが、絶対他力の信仰に徹した人であります。これにもまたさうあるべきわけがあるのです。端的に言へば、もと／＼絶対他力に帰したこと自体が、自分で自分の始末がつかなくなつたのに原因するのではありませんか。

弥陀仏は、私が悪くはいかぬ、心が醜くては救はぬとは言はれません。よくなれず、わるさもやまない私を、どこまでも見棄てない方であつてみれば、その心光に攝取されるのは、ありのままなる私であります。私の心の奥に宿る弥陀仏は、私以上に私を知悉して居られます。私自身の意識にさへのほらない心事までも見通しの先方に対しては、こちらから打明るも何もあつたものではありません。かへつて先方のへだてない気安だてから、遠慮、きがねの障壁をこえて、その蔭になつて居たものまでも目について、従来気づかなかつたところまでも、気づかして貰へるものです。

其の際、自知が深まれば深まるほど、一方にいよいよ慚愧の加はると同時に、他方にますます感謝の強められるのつねに沈み、つねに流転して、しばらくも出離の縁あることなし』とある、これが大師の有名人述懐であります。

聖人の常の仰

親鸞聖人もまた、全く同じ思召しから『弥陀の五劫思惟の願をよく／＼案すれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんと思召し立ちける本願のかたぢけなさよ』とつねに仰せられたといふことであります。

この常の仰せほど、絶対他力の信仰の契機を、簡明に、的確に、しかも周到に、完全に網羅し、翊々たる余音をさへふくめてある文は、またとないとおもはれます。聖人がよき人の仰せを聞いて、本願に帰せられた刹那、肝に銘じた印象そのままの披瀝とうかがはれるのであります。

『ひとへに親鸞一人がためなりけり』、罪惡深重、煩惱熾盛の、この私をたすけるための本願でましましたと、いただかれましたのであります。かうあつてこそ、与へる方と、受ける方の意気がしつくり合つて、ここに救済の大事が成就されます。私共さいは

が信仰の特徴なのであります。

絶対他力の鏡

かうした次第で、自己の赤裸々な姿は、絶対他力の鏡でなければ、十分にその姿を現はしません。鏡の中に、どんなあさましいマイナスの姿が写つても、弥陀仏の攝護のプラスの力に消されるから、すこしもためらふことがいらないのです。そこで『善もほしからず、悪もおそれなし』との不羈な態度に出られます。自己の有りのままの、真態を正視するには、この信的勇氣に基礎づけられなければ、とても堪えられるものではないと思ひます。

自知と攝護

試みにつきの和讃を誦して御覧なさい。自知と攝護の交渉がはつきりうかがはれます。

小悲小慈もなき身に

有情利益はおもふまじ

如來の願船あまさずば

苦海をいかでかわたるべき

蛇蝎奸詐のころにて

自力修善はかなふまじ

如來の廻向をたのまでは

無慚無愧にてはぞせん

善導大師は、一方に大悲の願船に乗じて、光明の広海に

浮びぬる身のしあはせをよるころばれながら、他方にしみじみと、蛇蝎もただならぬわが心根をなげかれました。

『わが身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた

ひにこの御文を読まして頂いて、内の思ひを遺憾なく言ひあらはさせていただく感があります。

これらの文を読みながら、その一言一句が、わが心にしみわたり、或は内から湧き出るかの感をいだくかたは、信を聖人と一つにする幸の持主であります。どうぞみなさんのさうあることを、或は一日も早くさうなられることを、切に希望する次第であります。

慈光社選書

人生と信仰

近角常観先生著。定価百八十円。

慈愛と眞実

近角常観先生著。定価百二十四円。

絶対他力と体験

池山栄吉先生著。定価二百廿四円。

佛と人

池山栄吉先生著。定価三百円。

歌異抄身讀記

福島政雄先生著。定価百八十円。

以上、發行所。京都市油小路通花屋町上ル丁字屋書店振替、京都一四五〇番。

編集後記

今年は近年まれな豊作。暴風もなく、草木もみのつて参ります。それにつけても、何時に交らぬ我身の歩み、『後生の一大事、一期を限り油断あるまじく候こと』と自らに言ひきかせた赤尾の道宗の声が、新しくひびいて参ります。

幸に中川区荒子町の蓮徳寺様から、棟方志功さんの版画を頂き、依の涅槃像に『おん道宗のたぐましの世襲像の上』の警句を添えられ、左の扉で、座右に掲げて警策を蒙つて居ります。

又九月末、近角先生の三週忌で伊恵子夫人西源寺に帰られ、京都の大谷にも御参詣の由で、御障りなけれど念じて居ります。それにつけても、『戦前戦後を通じて、只お見捨てない御真実一つで失望もなくやらせて頂いたについては、この仏の御真実ばかりは皆様に味つて頂きたい云々』との先生の德音を涙あらたに仰ぎました。

△池山先生の『歎異抄の何処か』は『信を行く旅人』中の抜文であります。歎異抄の玄意の何処かを、我等の身上にぢかに被るやうにとの先生の願ひの切なるを感佩申し、筆録させて貰ひました。

△甲南高校教授時代に、大阪医大の学生を中心として、猿乙語の歎異抄を講本として講話されたもので、むしろ宗教的白紙の方々の心を深く強くあざやかに印刻されたものであります。

△『めがね』の原稿から頂きました。先生理學の時間に一人間の目くらましの全なものはない。然しこの不完全なもので、これほどよく順応して見えるものもない』とさおつしやつたことも思ひ出されました。

△東京都渋谷区代々木本町七三一、短歌草原社。

△『信生活の三要点』は、特に聖徳太子の十七憲法を拜読申すについて、一番びつたりと信味されることであります。夫々に皆様も工夫して信嘗願ひます。

御案内

毎月、第一、二、三日曜、午後一時半。日曜講話。南区駄上町、日會館。

十月二十三日午後、國崎市藤川町伝馬寺、光和会講話
 十月三十日午前、岡崎市巾町大谷派別院、同朋会館、歎異抄三章講話。

定価 一部 十七円(送共)

半年 百円(送共)

一年 二百円(送共)

名古屋市南区駄上町二ノ二八

編集・発行人 花田 正夫

名古屋市千種区千種町馬走二

印刷 人 奥川 正生

名古屋市南区駄上町二ノ二八

發行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番